エリートＣＥＯ（元カレ）は
シンママを息子ごと娶り独占する

# 目次

エリートＣＥＯ（元カレ）はシンママを息子ごと娶り独占する　5

番外編

変わらず好きなモノ　259

植樹

体調不良

エリートＣＥＯ（元カレ）は
シンママを息子ごと娶り独占する

## プロローグ　シングルマザー瑞希の日常

イベント続きで慌ただしかったゴールデンウイークも終わり、徐々に暖かくなり過ごしやすい日が増えてきた季節。

自転車のジュニアシートから子供を抱き下ろし、私は拓也に被せていたヘルメットを外した。自宅から保育園までの短い移動時間だけでも、拓也の髪はしっとりと汗ばんでしまっている。

「今日は何して遊べるのかな？　楽しみだねー」

「ぶっぶ！」

「ぶっぶ？　そっかー、保育園も車の玩具、いっぱいあるもんね。いいねー」

声を掛けながら我が子を抱き上げ、子供用の小さな通園鞄とお昼寝布団、着替え袋を肩に掛ける。そこまで重くはないけれど、荷物で足元が全く見えなくなるし、正直言って歩きにくい。

けれど保育園の駐輪場で出会った保護者も皆、同じように大荷物を抱えている。

月曜の朝は特に荷物が嵩張るから大変だ。

オムツが外れたらもう少し荷物も減るだろうが、一歳半でまだトイレトレーニングを始めたばかりの拓也には遠い話だ。

小さな背に通園鞄を背負い、親と手を繋いで歩く大きい組の園児を目を細めて眺める。

こうやって抱っこで登園するのも今の内だけだ。

大荷物でふらつきそうになるのを踏ん張って、どうにか保育室の前に辿り着けば、あとは先生にお任せ——というわけにもいかない。世の中そこまで甘くできてはいない。

指定された棚に持ってきた物を順に片付けていき、替えのオムツを入れたビニール袋をトイレのフックに引っ掛けた。

朝の用意が終わったら、子供と一緒にお帳面に出席シールを貼っていく。園で決められた朝の準備を全てこなさないと、この場から立ち去ることは許されない。

帰りもまた同じように荷物を回収して回らないといけないし、お迎え時には丸一日分の使用済オムツで一杯になったゴミ袋も待っているのだ。

園によってはオムツはまとめて処分してくれるところもあるらしいが、拓也の通う保育園は衛生上の何たらで保護者が持ち帰る決まりだった。

一通りの朝の準備が済むと、子供が気付いていない内にさっと保育室を出る。見つかってしまうと大泣きされるのが目に見えているからだ。

万が一、泣かれてしまった時も優しく宥めている時間はないし、保育士さんに丸投げして逃げるように去るしかない。

後ろ髪を引かれるなんて悠長なことも言っていられないほど、私には余裕がない。
――やばい、急がなきゃっ！
駐輪場で自転車に飛び乗ると、勤務先を目指して猛ダッシュする。
私は田上瑞希、一人で一歳半になる息子の拓也を育てている、いわゆるシングルマザーだ。

いつも職場の朝礼に間に合うギリギリの時間になってしまうので、店で着替えている時間すら惜しい。いつの間にか、制服のまま通勤するようになった。
小綺麗な私服姿で送迎する他の保護者を羨ましがっている余裕ももちろんない。
拓也を通わせている保育園から自転車で二十分、ショッピングモールの一階。
その隅にテナントとして入っている携帯電話のキャリアショップが私の職場だ。
拓也を出産してから今の店に勤めるようになって、ちょうど一年が経とうとしていた。
「今月は実績給二倍月です。気合い入れて売っていきましょう」
「「よろしくお願いします」」
店内の簡単な清掃後、代わり映えのしない朝礼が終わると、各自が思い思いに動き出す。前日にやり残した仕事の続きをし始める者、新たに届いているメールやＦＡＸを確認する者、煙草を吸いに喫煙室に消えていく者。
同じ職場にいても、開店前のルーティーンは人それぞれだ。

今日みたいな普通の日は特に……
新機種の発売や予約開始日でもない限り、平日に朝一で店の前に行列ができることはほとんどない。
特にこんな奥まったところにある店は、開店時間が過ぎてもしばらくは閑散としているのが常だ。
「実績給二倍ってことは、店長から横取りされる売り上げも二倍ってことか……」
隣のカウンターに座った、同僚の西川恵美がはぁっとわざとらしく溜め息を吐いてみせた。
ショートボブのサイドの髪を耳に掛けて、きっちりと横に流した前髪。
マナー研修で合格点を貰える店員のお手本のような見た目に反し、眉を寄せて露骨な嫌悪を表わしているのが何とも言えない。
それに対しては何も言わず、私は半笑いを浮かべて同意する。
いま勤めている代理店は個人売り上げの一パーセントを実績給として給料に還元してもらえる。
といっても、携帯電話を新規で一台販売できても数十円にしかならないし、還元されるにも最低基準という名の下限もある。
基準以上の売り上げのない月は一円も貰えない。
世の中は本当に世知辛いわ……
そしてさらに、半年前から転任してきた山岡店長は露骨に売り上げを横取りしてくるタイプだ。
自分が住所変更などの簡単な手続きを受けている横で、他のスタッフが新規の可能性のある客を接

客していれば、すっと移動してきて強制的に受付を交代させ、新規販売を自分の手柄にしてしまう。
「繁忙店に戻りたくて、店長も必死なんだよ」
「普段は煙草ばっか吸ってて、何もしないくせにね」
転任当初は若くてイケメンだと騒いでいた女性スタッフ達も、今では誰も彼を支持していない。
いくら顔が良くても素行と実績が伴わなければ、誰も付いてはいかない。
私もこんなにボロくそに言われているイケメンを初めて見たし、過去最高に仕事のできない上司だと思っている。
職場は週明けで納品もなく、午前中は本社へ送る書類の準備をする時間もあったが、午後からは修理受付の客の来店が重なった。
ゲリラ豪雨的な雨が降った翌日は、水没が原因の故障で客が増える。
店に置いている代替機の台数が心配になるほどではなかったが、修理センターへの発送待ちのケースはいっぱいになってしまった。
それらを明日の朝一には出せるように準備をし終えて、ようやく営業時間が終わった。
「台数、全然少なかったけど、めちゃくちゃ忙しかったー。瑞希はこれからお迎え？」
「うん。今日はギリギリ延長がつかなそうで良かったわ」
看板類を片付け、バックヤードで私服に着替え終えた恵美と並んで店を出る。
イケメン店長は社用パソコンで他店の売り上げ実績をチェックしていたので、まだ帰りそうにない。
ショップの閉店時間は十九時だが、ショッピングモール自体が閉まるのは二十一時。
なので十九時を過ぎても客足が途絶えない日もある。
子供を預けている保育園は二十時を過ぎると延長料金が発生するから、どんなに遅くても十九時半には店を出たいのが本音だけれど――
「子持ちには定時で帰らせようとか、そういう優しさはないのか、あの店長は」
「山岡店長、まだ若いから」
「でもさ、延長料金って自腹なんでしょう？」
「……まあね、仕方ないよ。会社はそこまでは持ってくれないしね」
以前にいた店長は妻子持ちだったから、そういう気遣いにはとても長けていた。
でも、シングルマザーを理由に特別扱いされるのも居心地が良くない。
そう思って私なりにギリギリまで残るようにはしていた。
店長が代わっても最後まで仕事は終えてから退勤したい。
だから毎日、閉店時間前はバタバタだ。
ただ、延長料金が付く時間まで残業するのは勘弁してほしい。
実家にも頼れず、女手一つで子供を育てている身としては、余計な支出は増やしたくない。
店を出て夜道、自転車を飛ばして到着した保育園はしんと静まり返っていた。

朝は賑やかな子供の声が響く園舎だが、この時間帯にお迎えのある園児は限定される。
玄関と廊下、そして一部の保育室以外は完全に消灯されていた。
入ってすぐ手前にある職員室ですら、非常灯と何かの機械のボタンくらいしか光を発していない。
唯一まだ明るい保育室を覗いてみると、先生と二人きりで積み木遊びをしている拓也の姿があった。向かい合って座っている二人の周りにはたくさんの玩具が散らばっているから、自由に思い切り遊ばせてもらっていたのがよく分かる。
「遅くなりました。ありがとうございます」
「あ、おかえりなさーい。拓也くん、お母さんが帰ってきたよー」
先生の言葉が終わるより早く、よちよちと歩き寄ってきた拓也をしゃがんでぎゅっと抱き締めた。
朝、家で着せたのとは別のTシャツを着ていた。
園でのお昼寝でついたのか、また新しい寝ぐせを増やしている。
身近に触れた拓也からは園で使っているハンドソープの香りがした。
息子の些細な変化にも、長い時間を離れていたことを実感する。
「ただいま。拓也」
「おかりー」
この瞬間、全ての疲れが吹き飛んでいく。
理不尽なクレーム対応へのストレスとか、働かない上司へのイライラとか、そういった負の感情が一瞬でどうでも良いことに思えてくる。
これからまた自転車を漕いで家に帰り、夕食を作って子供に食べさせてお風呂に入れて、また明日の通園準備をしてというハードな試練がてんこ盛りで待ち受けていようが、子供の温もりに一旦はリセットされてしまうのが不思議だ。
今日一日の園生活の話を先生から聞きつつ、持ち帰る荷物を手際良くまとめていく。
行きと違って布団の持ち帰りがない分、ずいぶんと楽だ。
荷物を自転車の後ろに積んで息子にヘルメットを装着させていると、保育園の駐車場に一台の白色の車が停まっていることに気付いた。
国産のセダンっぽいが、手入れが行き届いているのか車体は駐車場の外灯に照らされてピカピカに光っていた。
――うわ、何か高そうな車。
車種はさっぱり分からないが、保育園の駐車場にあまり似つかわしくはない。
隅に停めてある保育士の軽自動車がかなり小さく見えた。
園長先生の知り合いか何かかと思ってそれ以上は気にも留めず、拓也を自転車に乗せようと抱っこした時、その白い車の助手席のドアが開いた。
思わず興味本位で振り返り、外灯で逆光になって現れたそのシルエットに私は息を呑んだ。
「……どうして」

駐輪場に向かってゆっくりと歩を進めてくるその人は、間違いなく私達に向かって近付いてくる。
はっきりと表情が分かるくらい距離がなくなった瞬間、腕を伸ばして抱き締められた。
「やっと会えた。瑞希」
聞き覚えのある穏やかな声。
短く整えられた髪やスリーピーススーツを着た姿は知らないが、その腕の温(ぬく)もりのことはよく知っている。
子供ごと抱き締められる体勢のまま、私はもう一度先ほどと同じ言葉を発した。
「どうして？」



## 第一章　突然の再会と伸也(しんや)の提案

どうして黙って消えたのか。
どうして急に連絡が取れなくなったのか。
どうして私のいる場所を見つけたのか。
どうして……
次々と湧き上がってくる「どうして」に続く言葉。
説明してほしいことはたくさんある。
けれど、言葉の代わりに出たのは頬を伝う涙だけ。
「マーマ？」
見知らぬ男に急に抱き締められ、母親も泣いている。
この理解できない状況に、まだ一歳の拓也まで釣られたように泣き始めた。
男は慌てて私と拓也から腕を離した。そして、眉を寄せて少しオロオロしながら、子供へ向かって謝る。
「あ、ごめんっ。えっと……拓也？」

私の胸にしがみつく拓也は、顔を埋めてしゃくり上げていた。
制服のブラウスを小さな手で必死に握り締める息子の姿に、冷静さを取り戻す。
その幼い背を優しくトントンと叩きながら、私は男を見上げた。
二年前に急に私の前からいなくなった元カレ、安達伸也。
彼と連絡が付かなくなってから気付いた妊娠は、その後の私の人生を大きく変えた。
「一から説明してくれるかな？」
「……はい」
伸也は再会で盛り上がったテンションを地面に叩きつけられたとばかりに、一気にシュンとしたようだ。私達に車へ乗るように勧める。
言われて大人しく乗るつもりで駐車場の方を向きかけたが、はたと気付く。
「あ、自転車」
「そっか、じゃあ、車は先に帰ってもらうよ」
家まで歩きながら話そうと提案してから、伸也は白のセダンの元に赴き、運転席の誰かと話しているようだった。
その後、黒のビジネスバッグを手にすぐに駐輪場に戻ってきた彼は、チャイルドシートに子供を乗せた自転車を押す私と並んで歩き始める。
その横を通り過ぎていく際、白い車の運転手がこちらへ向けて丁寧に頭を下げているのが見えた。

「良かったの？」
「ああ、あれは社用車だから。先に帰ってもらうことにしたし、大丈夫」
――社用車？
首を傾げた私に、伸也は「何から話したらいいんだろ」と鼻の頭を人差し指でかいている。
いつもとは違うゆっくりペースの自転車の揺れが心地良かったのか、チャイルドシートに収まっていた拓也は完全に眠ってしまっていた。
ベルトで身体が固定されているとはいえ、自転車の振動に合わせてガクガクと揺れる頭が危なっかしい。
「へー、寝ちゃってるね」
伸也は興味津々でシートを覗き込んでいる。
そういえば、なぜ彼が息子の名前や通っている保育園を知っていたのだろう。
子供を産んで以降、共通の知り合いに会った覚えはない。
「何で、この子の名前を知ってるの？」
「調べたからね。帰国してすぐ、瑞希を探していろいろと」
近い内に渡米するかも、そう宣言した後、気が付いた時には伸也はいなくなっていた。
彼が借りていた部屋が引き払われていることを知って、慌てて携帯に電話した私が聞かされたのは「お使いの電話は、お客様のご都合により……」という素っ気ない音声ガイダンスだった。

「ごめん。向こうの空港に着いてすぐ、鞄ごとスられちゃって、携帯は緊急停止するしかなかったんだよ」

拓也を妊娠する前も今と同じキャリアショップに勤務していたから、伸也の携帯が解約されたわけでないことは分かっていた。

わけあって一時的に使えなくなっただけだと、すぐに復活して連絡が来るかもと電話帳から消さずに待っていた番号は、今も変わらず私のスマホに登録されている。

何度も消そうと思ったこともあったけれど、結局はできなかった。

裏切られたという気持ちが大きくなってからも、やっぱりどこかで信じていたのかもしれない。

「帰ってきて速攻で新しいのを買い直したけど、瑞希の電話が繋(つな)がらなくてさ」

「うん、番号変えたから。ちょっといろいろあってね」

妊娠が分かった時、簡単におろせと言ってくる人がとても多く、一人で産むと決めたと同時にたくさんの人との縁を切った。

否、私の方が切られたことも多かった。

誰も味方なんていないと思ったから、携帯番号を変更することにためらいはなかった。

実の親なんて世間体を気にした挙句に、同じ姓を名乗ってほしくないと母方の祖父母との養子縁組を勧める始末。

おかげで、相沢(あいざわ)瑞希は田上瑞希になってしまった。



「瑞希の実家にも行ってみたけど、うちにはそんな娘はいませんとか言って追い出されたよ」

「勘当というか、縁を切られたからね」

自分で言ってて、情けなくなってくる。

拓也を身籠ったことで、それまでの周りとの関係の希薄さを思い知った。

養子に入れてくれた祖父母でさえ、渋々という風で誰も助けてはくれなかった。

唯一の救いは、実家暮らしの二十代後半ってことで、貯金がそれなりにあったことだけ。それまで地味に生きていた自分をめちゃくちゃ褒めてやりたい。

産院で教えてもらったシングルマザー向けの支援団体に助けを求め、一人で息子を出産し、部屋も仕事も保育園も必死で探した。

特に部屋を探す時に、この世界が思っていた以上にシングルマザーには優しくないことを思い知らされた。ファミリー向けは家賃が高くて手を出せず、ワンルームだと夜泣きする可能性のある乳幼児連れは断られてしまう。

その間、消えてしまった伸也のことは風の噂すら聞かなかった。

「本当に、ごめん。瑞希には謝っても謝り切れない」

ちゃんと話をする前に、無理矢理に渡米させられたと言う元カレの言葉を、「はい、そうですか」と受け入れられる器は私にはない。

素直に信じて、また傷付いたり悲しい思いをしたりするのは勘弁だ。

「ちゃんと説明したくて、いろいろ持ってきたんだけど、家に入れてもらえるかな？」
話しながら歩いている内に、私達の住むアパートの前に着いていた。
いろいろ調べたというだけあって、伸也は私の家の住所まで把握しているようだ。
築年数が想像できないような年季の入った建物にも、特に驚いた素振りは見せていない。ここに住んでいる私でさえ、不動産屋から初めて連れてこられた際は、その古さと廃墟感に言葉が出なかったくらいだったのに。
チャイルドシートで眠る拓也をちらりと見て、諦めて伸也に頷き返す。
小さな子供をいつまでも外で連れ回しているわけにはいかないし、このまま眠ってしまうなら、きちんと着替えさせてから布団に寝かせてあげたい。
駐輪場所に自転車を停めてから、一〇二号室の鍵を開ける。
たいした家具もない殺風景な部屋に、伸也はさすがに驚きを隠せなかったようだ。
靴を数足並べただけで一杯になってしまうような、名ばかりの玄関で、目をぱちくりさせて立ち尽くしていた。
テレビすらない１ＤＫの部屋には小さなテーブルと、折り畳まれた布団。
それでも、部屋の片隅に置かれたカゴの中には子供の玩具が詰め込まれていて、唯一の収納家具とも言えるカラーボックスには絵本が並んでいる。
部屋全体を見回すのに数秒も必要としない。



私に促され、フローリングの上に直に座りながら、伸也はネクタイを少しだけ緩めてから部屋の中を改めて見渡していた。

◇　◇　◇

部屋を見るだけで、瑞希が拓也のために頑張っていることが一目瞭然だった。
壁に掛けられた女性物の洋服のほとんどに見覚えがあった。
二年前にも彼女は同じ物を着ていた。
つまり、俺が消息を絶っていた間、瑞希は拓也のためだけに生きていたのだ。
自分自身のことは後回しにして。
子供用の小さな布団に拓也を寝かしつけている瑞希の後ろ姿をじっと見つめ、膝の上で拳を強く握り締める。
全てを軽く考えていた自分が情けない。
自分と彼女とは全く別の時を過ごしていたことを、この時初めて悟った。
保育園から持ち帰ってきた荷物を片付け、洗面所で部屋着に着替えた瑞希は、冷蔵庫の中から休日に仕込んでおいたらしき食材が入った保存容器を取り出して、俺の方を振り返った。
毎日当たり前のようにこなしているのだろう、台所に立っている動きに無駄がない。

「夕飯まだだったら、簡単な物しかできないけどいい？」
「あ、うん。ありがとう……じゃなくて、先に話を聞いてほしい」
「無理。私がお腹ペコペコだから」
二年ぶりの再会なのに、すっかり瑞希のペースだ。
これが母の強さなのかと感心しかけ、否、強くならざるを得ない状況に追い込んだのは自分だったと気付く。
あらかじめ切っておいたらしい材料で手早く八宝菜を作ると、瑞希は不揃いな器二つにご飯を盛り、その上に載せた。
洗い物も少なくて済むだろう野菜たっぷりな中華丼にすると、割り箸を添えて俺の前にも一皿置いてくれる。
「ごめんね、食器とか全然揃えてなくって……しかも、全部百均だし」
恥ずかしそうに笑いながら向かいに腰を下ろしてから、瑞希は「いただきます」と両手を合わせていた。
離れていた二年の間に強く逞しい母となったが、食事の作法は変わらない。
正座して背筋を真っ直ぐに伸ばし、しっかりと親から躾けられたのが分かる育ちの良い箸使いをする。
一度は手に取った割り箸を、俺は意を決してテーブルへと置き戻した。そして、崩していた足を正して、瑞希に向かって頭を下げる。
「ずっと連絡が取れなくて、ごめん。瑞希一人に苦労させてしまって、ごめん」
瑞希は中華丼を頬張ったまま、頭を下げている俺のことを静かに見ていた。
でも、しばらくして頭を戻した俺の顔は、泣く寸前で我慢している時の拓也の顔とそっくりだったらしく、そんな顔を見せられてしまったら、怒る気は失せると呆れ顔になる。
「とりあえず食べて。その後に一から順に説明してくれる？」
「……分かった。いただきます」
瑞希を真似て両手を合わせる。
割り箸を二つに割って口に入れた中華丼を、俺は美味しいと目を細めながら食べた。

◇　◇　◇

食事を終え、手早く洗い物を済ませて再び戻った私の前に、伸也は持ち込んだビジネスバッグの中から分厚い資料の束を取り出した。
「二年前、母方の祖父が急死して、後を継ぐための修業に行けって言われて、考える間もなくロサンゼルス行きの飛行機に無理矢理乗せられた。二日酔いで朦朧としてる内に、気が付いたら雲の上飛んでた……」

「え……」
「ほぼ、拉致だったね。前日の飲み会も、祖父の会社がらみの人とだったから、計画的犯行」
社内派閥の関係でどうしても血縁者である伸也を次期社長にしたい者達に仕組まれたらしい。事情が分かったのは、それからずいぶん経った後だったそうだ。
手持ちの鞄一つで渡米させられた彼は、その唯一の荷物さえも空港内で失ってしまった。
「海外って、怖いよね。二日酔いで頭痛くてぼーっとしてる内に、鞄ごと持ってかれたよ」
「……」
思い出しておかしそうに伸也は笑っていたが、聞かされた私は笑って良いものかどうか分からず、無言のまま顔を引きつらせた。
空港まで迎えに来ていた関係者によってその後のフォローもあり、携帯やクレジットカード類の利用停止の手続きはできたが、肝心の私への連絡手段がなくなってしまったのだという。
不幸中の幸いは、パスポートは付き添っていた会社の人に管理されていたから盗られず済んだことくらい。おかげで大使館の世話になることはなかったみたいだ。
「隙を見て一旦帰国するつもりだったんだけど、そんな余裕すらなくてさ。せめて一日でも早く修業を終わらせようと、必死で仕事を覚えたよ」
結局、帰国まで二年もかかったのだという。
そして、日本に帰ってきて継ぐことになった会社のパンフレットを私の前に広げて見せる。



付き合っていた頃に彼が勤めていた会社の親会社にもあたる、ＫＡＪＩコーポレーション。全国に支社を構える大企業だ。
刷り上がったばかりだという最新のパンフレットの一ページ目には、目の前にいる伸也のすました顔が代表取締役ＣＥＯとして大きく掲載されていた。
就任日が先月の日付になっているので、本当に帰国したばかりなのだと分かる。
帰国後すぐに携帯番号を復活させて、連絡先の分かる知り合いを伝手に自力で私を探してはみたが、どうしても見つからなかった。
共通の友人は元から少なかったが、その誰もが居場所も連絡先も知らないと言う。絶望的だったらしい。
ただ分かったのは、私に子供がいるかもしれないということだけ。
無事に生まれているかどうかの情報を持つ者は誰一人としていなかったが。
けれど、間違いなく自分との子だと思った伸也は、必死で私達親子を探し続けてくれた。
「で、ごめん。どうしても早く会いたくて、信用調査会社を使った。これが受け取った資料」
冊子状に綴じられた分厚い調査報告書には、住所や勤務先、改姓したことなどが記載され、ついこの最近の私と拓也の写真も貼られていた。
パラパラと捲ると、拓也を出産した産院の情報や今月の勤務シフト表まであった。
「うわっ」

「ごめん、俺もここまで調べてくるとは思わなくって……」
あまりの個人情報の漏洩っぷりにドン引きした。
怖いを通り越して、すごいと感心してしまうレベルだ。
下手したら私本人が知らなかったことまで記載されていたりする。
そして拓也の出産にまつわるページには、父親と思われる人物として伸也の名が書かれていた。
妊娠の可能性がある時期の交際歴から推測されたのだろうか。
私がそこで目を留めたのに気付いた伸也が、嬉しそうに笑った。
「ＤＮＡ鑑定する必要のないくらい、そっくりですよって言われたよ」
伸也はまた改めて頭を下げる。
信用調査会社で言われたからじゃなく、私のことをよく理解しているからこそ、この子の父親は自分以外にはいないと確信したようだ。
「拓也を生んでくれて、ありがとう。一人で苦労させて、ごめん」
「それはさっき聞いた」
「そっか、じゃあ――これからは俺に二人を守らせてください。俺にはそうする義務があるし、そうしたい」
信用調査会社の資料の上に、伸也は必要事項の記入を終えた婚姻届と、拓也の出生に関する認知届を重ねた。



伸也の突然の申し出に驚いて目を丸くしたが、徐々に困惑の気持ちが湧いてきた。
「こっちは瑞希が承諾してくれれば、明日にでも出してくる」
母親の欄以外を全て埋められた認知届。
私自身も、拓也の戸籍に父親の名がない状態は申しわけなかった。
けれど嬉しいと思う半面、本当にそれでいいのかなと思ってしまった。
「伸也は、困らないの？　今の立場的に……」
国内にいくつも支社を抱える会社の代表に隠し子がいたとなれば、大問題にならないだろうか。
私の心配をよそに、伸也は部屋の隅に敷かれた布団で眠る息子の顔に視線を移し、穏やかに微笑み返した。
その笑顔もまた、拓也と瓜二つだった。
「瑞希との連絡手段がなくなった時ほどは、困ることなんてないよ」
一人で考える時間も必要だろうと、無理に急かすことはせずに伸也は私のアパートを出ていった。
いくら何でも、急に目の前に現れた元カレの言うことを鵜呑みにするわけにはいかない。
子供を産みたいと思うほどに愛した人だったが、この二年間の彼のことは何も知らないのだから。
テーブルの上に積み上げられた資料の山が、明日の朝には夢となって消えている予感さえした。
嘘っぽい、とても都合が良過ぎる夢だ。
眠っている拓也の頭を優しく撫でていると、この子を産んでからの一年半の出来事が走馬灯のよ

うに脳裏を流れていく。
あの思い出の中に伸也もいてくれたら、どんなに心強かっただろうか。



## 第二章　職場への来訪と契約

結局、朝まで起きることがなかった拓也を慌ただしくお風呂に入れてから、その一日は始まった。
そうでなくても時間の余裕のない出勤前に、子供をお風呂に入れるという試練が追加され、私はショップに着く前からドッと疲れた。
昨夜のことをゆっくり考える時間なんて、全くと言っていいくらいになかった。
今日こそ朝礼に遅刻するかもと焦り、保育園からの道のりの半分は立ち漕ぎで自転車を飛ばした。
汗だくで漕いでいる私の横を、涼しい顔をして追い越していく電動アシスト付き自転車のサラリーマンには殺意すら覚えた。
ただのノーマルなママチャリでさえ、子供用の椅子を追加したりヘルメットを用意したりと結構な金額を支払ったと思う。
まして電動アシスト付きなんて、高過ぎて売り場すら見て回った記憶もない。
世の中、少しでも楽しようと思うと余計にお金がかかるのだ。なんて、シビアな世界だ。
今日もギリギリで出勤してきた私を、若きイケメン店長はじろりと冷たい視線で出迎えてくれた。
今月の実績表を挟んだバインダーを手に、スマホで時間を確認してからスタッフに招集をかける。

毎朝、九時半きっかり秒単位で開始される朝礼は、今日もたいした内容でもなく前日の売り上げ金額を読み上げていくだけで終わった。
「それでは、本日もよろしくお願いします」
「「よろしくお願いします」」
締めの挨拶後、各々の作業に戻る。
よろしくと言っていたくせに、店長率いる数名は喫煙室に一直線なのはいつものこと。
掃除も開店準備もする素振りすら見せない。
そんなすぐに休憩が必要になるような朝礼じゃなかっただろうにと、恵美の毒舌は今朝も炸裂している。
しばらくするとショッピングモール内に開店を知らせる放送が流れ、やたら爽やかな音楽が鳴り響く。遠くの方で来客のざわめきが聞こえているが、モールの隅っこの店舗に人通りができるまではタイムラグがある。
私は昨日の閉店間際にまとめておいた修理機を梱包し、配送業者が来た時にすぐに出せるようにと送り状を書き始めた。接客業とはいっても、意外と事務作業の方が多い。
「いらっしゃいませー」
隣のカウンターに座る恵美が、一番乗りした来客に声を掛ける。
混み合っている時に使う発券機も平日は全く使われることがない。手の空いている者から対応していくのがこの店舗でのやり方だった。
「私、行ってくるね」
「うん、お願い」
張り切ってカウンターを出ていく恵美の様子から、若いイケメン客でも来たのだろう。
どれどれ、と書き終わったばかりの送り状から顔を上げた。
「あ、伸也」
恵美が積極的に話しかけに出た客は、昨夜とはまた違う黒色のスリーピース姿の元カレ、安達伸也だった。
仕事の途中なのだろうか光沢のある青のネクタイを締め、恵美に示されて私に気付いたらしく、早足でカウンターへと歩み寄ってきた。
「おはよう。瑞希」
ニコニコと人懐っこい笑顔を振りまきながら、私の前の椅子を引いて当たり前のように腰掛ける。
二年もの間一切の連絡もなかった元カレが、昨日に続いて二日連続で目の前に現れた。
思わず動揺してしまうのは無理もないだろう。
何なら、昨日の出来事はただの夢だったのかもと思えてきて、昨晩彼が持ち込んできた資料を朝一で再確認してしまったくらいだ。
だから、目をぱちくりさせたまま、カウンターの中で椅子から立ち上がるのが精一杯だった。

「えっと……」

大会社のCEOって、こんな朝からフラフラしてられるものなのかと、昨日聞いた話を端から疑ってしまう。

就任したばかりなら、今が一番忙しい時期なんじゃないかと思うのだが……

不審がる私に気付いたのか、伸也は少し困ったように笑っている。

「今日は仕事の話と、瑞希からの信頼回復のために来た」

「仕事の話？」

「とりあえず、法人名義で新規十台をお願いしたいんだけど」

「十台口⁉」とカウンター後ろで社内パソコンを触っていた山岡店長が、慌てて立ち上がった気配がした。

素知らぬフリをしながら、私達の会話を盗み聞きしていたのがバレバレだ。

大口の台数もそうだが、法人名義となると売り上げがまた違う。

個人に比べて法人契約は旨味が大きい。

それが複数台ともなると、横取り店長の異名を持つ山岡店長が飛び付かないわけがない。

胸ポケットから名刺入れを取り出しながら、私の横に立った山岡店長が伸也に向かって自分の名刺を差し出す。代われとばかりにグイグイと横から私の椅子を押してきて、降って湧いた大口案件を奪う気満々なのが分かった。



いきなり突きつけられた名刺にはちらりと一瞬だけ視線を送った後、伸也は困ったように人差し指で鼻の頭をかく。

「あー、彼女に受付してもらいたんだけどな」

「……田上さんのお知り合い、ですか？」

さすがの横取り君も、コネ案件までは手が出せない。

急激にテンションの下がった店長に、伸也は嬉しそうに答えた。

「婚約者候補、ってところかな？」

向かいに座る私の顔を覗き込んで、確認するように聞いてくる。

さすがに子供の父親ですと紹介するわけにもいかない。

私は曖昧に笑って誤魔化した。

上司が元の席に戻っていくのを確認すると、頭を仕事モードに切り替える。

伸也に対してはいろいろ言わなきゃいけないこともあるが、まずは目先の仕事をこなす方が先だ。

産後に今の代理店に勤めるようになってからは一年だが、その前も同業種の別代理店に三年ほど勤務していた。業界歴は店長よりも実は長いのだ。

法人案件が美味しいことは十分に理解している。我ながら現金だ。

「新規十台って、既存回線はあるの？」

「今、営業が使っているのは別の会社だから、多分ないかな」

「そう、じゃあ支払い実績がないと法人でも最初から十台は審査通らないかも。先に数台だけで、残りは来月とかになることもあると思ってて」
「別に急いでないし、何でもいいよ」
法人でも個人でも、複数台をまとめて新規登録するには台数制限がかかることがある。
最初は三台だけ通して、残りは初回料金の支払いを確認してから、というのがよくあるパターンだ。
「とりあえず、試しに審査通してみるね」
「任せる。これ、登記簿と俺の名刺ね。あと印鑑と通帳だっけ」
あらかじめ調べておいたらしく、登録に必要な物を私の目の前に並べていく。
本来なら経理が管理しているだろう銀行印や通帳を、ＣＥＯが気軽に持ち歩いている状況に首を傾げた。
間違いなく、これは彼の本来の仕事ではないはずだ。
「瑞希と拓也が生活できてたのは、ここのおかげだからね。ちゃんと恩返ししなきゃ」
経理の人間が止めるのを振り切って、自らが行くと無理を通してきたらしい。
「誰かに任せるのは簡単だが、それでは瑞希の信頼は取り戻せない」
そう言って伸也はにっこりと笑った。
彼に接客用の笑顔を返してからコピーを取りに離れたけれど、伸也の熱い瞳が私の背を追いかけてきた気がした。

伸也から依頼された新規契約の手続きはとても楽だった。
必要な書類は完璧に持参し、希望機種やカラーも勧める前に指定してくれ、在庫がない場合の予備の希望までも使用予定者に聞き取り済みだった。
余計な説明が必要ない、模範的な客だ。
台数があるので記入する箇所は多かったが流れ作業のように手続きは進んでいく。
同僚の恵美にも手伝ってもらいながら仕上げた契約書の審査を待つ間、伸也は待合スペースのソファーに座り、膝の上に広げたノートパソコンで仕事をしているようだった。
途中でスマホが鳴ればパソコンを抱えて店の外に出て、通話が終われば戻って続きをするということを頻繁に繰り返している。
私が思っていた以上に今の伸也は多忙そうに見えた。
そんな中でありながらも自分のことを探し出してくれたことに、胸の奥がじんわり熱くなる。
会社名義の携帯を買いに行くなんて仕事はいくらでも代理が立てられる。
登記簿や名刺を見る限り間違いなく社長兼ＣＥＯである彼が、自ら出向かないといけないなんてことはない。社員証や名刺があれば総務や経理の人が手続きに来るのが一般的だ。彼の会社規模なら代理店への電話一つで、法人用の営業担当者を会社へ呼び付けることだって容易(たやす)い。山岡店長な

ら尻尾振って喜んで訪問するだろう。
そもそも、すでにある営業用の電話は別会社の契約だというのだから、あえて彼が私の勤めるキャリアの物を求める理由は一つしかない。
思い切り、公私混同だ。
と、店の固定電話の呼び出し音が鳴り響く。
登録に何らかの不備があった場合、サポートセンターから連絡が来ることがある。
私はドキリとしながら店長のデスクを振り返った。
ワンコールで受話器を上げた山岡店長の声色は、あまり明るくはない。
「――はい。あー、そうですか。かしこまりました」
社用パソコンの陰に隠れていて、話している店長の表情は全く見えない。
短い会話の後に電話が切られると、私は確認しようと立ち上がる。
完全な新規契約の時はいつも緊張する。
登録が上がる前にお渡しの準備が全て済んでいても、不備があって審査が通らなければ全てキャンセルになって流れてしまう。
「ＫＡＪＩコーポレーション様、十台口の審査通ったらしい」
「十台とも、ですか？」
個人実績の横取りはできなかったけれど、店舗の実績には大きく影響することもあり、山岡店長



は先ほどとは打って変わってご機嫌の声を張り上げた。
「九州支社様の方で既存回線があったから問題ないらしい」
待合スペースの伸也を見ると、こちらを向いてニコニコと微笑んでいた。
私の仕事への貢献もできた上に、彼が継いだ会社がちゃんとしているという証明にもなったからだろうか。
「今後、本社の社用携帯は全て切り替えようと思ってる。あと、個人名義の携帯で仕事しているのもいるから、そちらは名義変更も必要になるかな。まだ全部は把握し切れてないから、合計で何台になるかは分からないけど」
登録が終わった携帯はまとめて会社に送り届けるように頼んだ後、伸也は店長が卒倒しそうなことをさらっと言ってのける。
「もちろん、全部一気には無理だから様子を見て少しずつになると思うけど。それでも、瑞希なら損させないだろ？」
経理から預かってきたという、各回線の利用明細書の束を取り出す。
伸也から受け取った明細に順に目を通していく。
「そうね。プランが合ってなかったり、割引も適応されてなかったりするのが多いから、かなり通信費は下がると思う。これなんか、法人割引すら入ってないし」
はるか昔に契約したまま、プランの見直しもなく引き継がれてきたのがありありと分かる利用明

細。ひどいものだと、社用携帯なのに有料サイトの月会費が毎月計上されたまま放置されている。
最適なプランに変更することができれば、大幅な経費削減に繋がるはずだ。
「うん、瑞希に任せるよ」
満足そうに頷くと、伸也はにこりと微笑んでいた。
私をちゃんと評価して認めてくれる、そういう伸也が大好きだった。彼の変わらない部分を垣間見られたことに少しホッとする。
「さすがに次からは、代わりの者が来ると思うけど、瑞希を訪ねるように伝えておく」
「じゃあ、名刺を何枚か渡しとくね」
横取り君の存在を察したらしく、伸也は「瑞希を訪ねるように」という部分を少し強調して言った。
それが聞こえたのかどうかは分からないが、伸也が帰る際の見送りには山岡店長が率先して出たがり、店舗入り口どころかショッピングモールの入り口まで付いていったらしい。
午前中に一日の売り上げ目標を達成したことで、早めの休憩を恵美と二人揃って取らせてもらえた。ショッピングモールの社員食堂でお弁当を広げる。
まだ昼前だから食堂を利用している人は少なく、厨房で調理する音がよく耳に入ってくる。
「さっきの安達社長ってさ、拓也君のお父さんでしょう？」
「え？」



急に指摘され、飲み込みかけていたご飯が焦って変なところに入ってしまう。
咳込む私の背をトントンと叩きながら、恵美はやっぱりねと呟く。
恵美は本日の日替わり定食になっていたアジフライを割り箸で軽くつつきながら、私の顔をからかうように覗いてくる。
「イケメンの遺伝子って怖いねー。そっくりだったし」
「そ、そんなにかな？」
「いやー、最初この人なんか見たことあるなぁって思ってて、接客しながらチラチラ観察していたら気付いたのよね。拓也君じゃんって」
いつ拓也本人の耳に入ってしまうかも分からないので、これまで私は伸也と連絡が途絶えてしまって一人きりで子供を産んだことも、実家から縁を切られて苗字まで変わってしまったことも、誰にも話さなかった。
もちろん、職場で一番の仲良しである恵美にも。
おそらく周りの人達は皆、私のことは単に結婚離婚を経験したシングルマザーで、相手が行方不明になった末の未婚の母だとは思っていないはずだ。
「婚約者候補って言っていたから、復縁を迫られているとか？　ってか、安達社長って瑞希の元旦那ってこと？」
今日の恵美はやけに鋭くて、少し怖いくらいだ。

認知届と婚姻届を渡されたばかりなんて、口が裂けても言えない。
――復縁か……そもそも私達って、いつ別れたことになるんだろう？

勤務先への突然の訪問からしばらく、伸也は私の前には現れなかった。
ただ、シフトが休みの日には必ず玄関のチャイムが鳴り、ＫＡＪＩコーポレーションの本社ビルから近い百貨店の包装紙に包まれた贈り物が届くようになった。
拓也のための子供服や玩具（おもちゃ）だけでなく、私用の洋服など。
以前に私が好んで買っていたショップの好きなテイストの物ばかりで、伸也が意外とよく覚えてくれていると知った。
「こちらにサインか印鑑をお願いします」
「はい……」
百円均一で購入した印鑑を指定された欄に押していると、休日の度に顔を合わせるようになった配達員が、私の肩越しに部屋の中を覗（のぞ）き見したのに気付いた。
この古ぼけたアパートへ立て続けに百貨店から荷物が届いている状態に、何事かとつい興味が湧いてしまう気持ちも分からないでもない。
私自身も、これまでは全く縁のなかった上品な包装紙に包まれた荷物に、もしかして誤配達じゃないかと毎回念入りに送り状を確認してしまうくらいだから。



今回も送り状に記載された名前をしっかりと確かめてから荷物を受け取ると、両手で抱えて部屋の中に持ち運ぶ。
忙しい彼のことだ、これは直接買いに行った物ではないと分かっている。
秘書的な人に要望を伝えて任せただけかもしれない。
でも毎回添えられているメッセージカードの文字は間違いなく伸也の物だ。
私は受け取る度にクローゼットの引き出しへ大事に仕舞った。
カード一枚書くのだって、忙しい伸也には結構な手間なはずだ。
実家を出てからは一切自分の洋服を買わなかった私には、花やアクセサリー類よりもよっぽど嬉しく実用的な贈り物だった。
二十六歳の時に着ていた服の中には、子持ちの二十八歳が着るには厳しい物もあって、同じ服を交互に着て誤魔化（ごまか）す日々だったから。
年齢的にはたった二歳しか変わってなくても、子供がいるかいないかでワードローブは大幅に変わる。
伸也からのプレゼントが最初に届いた時は、さすがに受け取るのをためらった。
無条件で人から物を貰（もら）うことにそこまで慣れてはいない。
それに、彼にも事情があったとはいえ、ずっと連絡なく放置されたことで私の人生は大きく変えられてしまった。簡単に許し、なびくわけにはいかない。

そんな頑なな私の考えを分かっているのか、最初に受け取ったカードには再会を喜ぶ言葉と共に、「拓也への養育費の一部とでも思って、気にせず受け取ってほしい」と記されていた。

――まあ、養育費なら受け取る権利はあるわけだし。受け取ることで、伸也も少しは気が済むんだったら……

遠慮という言葉は、分娩台の上にすっぱりと置いてきた。

二年ぶりに再会した夜に受け取った婚姻届も認知届のどちらも、まだ私の手元にある。

拓也の将来を思えば認知はしてもらいたいが、今の伸也が背負っているものの大きさを考えると躊躇してしまう。

先日、恵美から「ビジネス誌で安達社長がインタビューを受けていたよ」と言われ、そのためらいはさらに強くなっていた。今の彼にとって、拓也の存在はただの隠し子だ。

CEOに就任したばかりの伸也には背負う荷が重過ぎるのではないだろうか。

自分達の存在は、彼の足手まといになってしまわないだろうか。

「ぶっぶー」

届いたばかりの車の玩具を握り締めて拓也は朝からご機嫌そうだ。フローリングの上を豪快に車を走らせて回っている。

いつの間に、車は走らせて遊ぶ物だと覚えたんだろう？

つい最近まで玩具は口に入れるか、投げるかだったのに、ちゃんと上手に遊べるようになっていることに驚く。

子供の成長は早い。

あっという間に拓也は大きくなっていく。

だからこそ先送りせず、伸也とちゃんと話し合わなければと少しばかり焦りを感じる。

それでも、まだ認知も入籍もしていなくても、父親である伸也と再び会えたことは徐々に心の支えとなりつつあった。

妊娠検査薬が陽性ラインを示した時から、生きていく上での何もかもを一人で決めてきた。初めての出産も、初めての子育ても。

誰にも相談できないことばかりだった。

離れていった人、消えていった縁、逃げるように去った地元とは関係が戻る日が来るとは思えない。ガラリと変わってしまった周りの人間関係。

――でも、伸也だけは戻ってきてくれた。

伸也にそっくりな息子をぎゅっと抱き寄せる。

遊んでもらえるとでも思ったのか、拓也は持っていた玩具を私の目の前に掲げてみせる。拓也の得意げな顔を見れば、新しい玩具をとても気に入っているのがよく分かる。

「マーマ。ぶっぶー」

「うん、カッコいいの貰えて良かったねー」

これまでの伸也から息子へのプレゼントの中には、私が知らないキャラクターの物もいくつかあった。

見る余裕も買うお金もなかったから後回しにしていて、気付いた時にはテレビのない生活にも慣れていた。

生まれた時からテレビとは無縁の拓也だが、それでも届いたヌイグルミを気に入って保育園にも連れていきたがるくらいだった。

異様に気に入られたキャラが何なのか気になり出して、スマホを使って調べてみたら、やはりというか教育テレビで人気のあるキャラらしい。

初見の幼児の心をあっさり掴んでしまうなんて……おそるべし。

子供の車遊びに少し付き合った後、プレゼントのお礼のメールを伸也へ送る。

ずっと停止されたままだった携帯番号を帰国後に復活させたという話は真実で、私が電話帳に記録したままだった番号もメアドもちゃんと使えるようになっていた。

これまで何度掛けても鳴らなかった呼び出し音が今はちゃんと鳴るし、送った瞬間に届いてしまう自動のリターンメールもない。

『午後に時間が取れそうだから、瑞希と拓也に会いたい』

五分もしない内に届いた返信を確認して、私は焦って部屋の中を見回した。

昨日までの連勤の影響を受けて散らかった室内を慌てて片付け始める。



取り繕うところもない殺風景な部屋でも、散らかる時は散らかる。

伸也と再会した夜、それほど荒れていなかったことは奇跡かもしれない。

床に散乱した玩具（おもちゃ）をカゴに放り込み、畳んで積み上げられていた洗濯物をクローゼットに収納していく。

雑に重ねていた布団を丁寧に畳み直すと、拓也が喜んで登って遊び始め、一瞬で雪崩を起こしていた。

「拓也。後でお客さんが来るから、あまりぐちゃぐちゃにしないでー」

新しい遊びを見つけた子供を背中で気にしつつ、私は狭いキッチンスペースに立って、作業途中だった総菜の作り置きと下拵（したごしら）えに取り掛かる。

休日にちゃんと準備しておかないと、仕事から帰った後に地獄を見ることになる。

勤務時の自分を助けてくれるのは、休日の自分だ。

昼食を終え、お昼寝のために拓也を寝かしつけていると、アパートの前に車が停まってドアを開け閉めする音が聞こえてきた。

ようやく眠りについた息子がチャイムで起こされては堪（たま）らない。

私はキッチンの窓から外を確認し、先回りして玄関のドアを開ける。

「ごめん、拓也が今寝たとこだから」

唇の前に人差し指を当てて、伸也へ静かに入るようにお願いする。

ドアを閉める前に、こないだ見たのと同じ白い車がアパート前の道路を走り去っていくのが目に入った。社用車だと伸也が言っていた、運転手付きのセダンだ。

仕事を途中で抜け出したのか、濃いグレーのスリーピース姿の伸也は部屋に上がると真っ先に子供布団に歩み寄った。

そして、眠っている拓也の顔を覗き込んでニコニコと微笑む。

「可愛いなぁ」と呟きながら、子供の寝顔を食い入るように見ている。

「伸也って、子供好きだったんだね」

「そうでもない。拓也だけは特別」

父性が芽生えるほど会ったわけでもないのに不思議だ。

私も隣で一緒に拓也を見始める。

こうしてじっくりと息子の寝姿を見守るのは、久しぶりかもしれない。

普段なら子供が眠っている時は、溜まっている家事を処理する貴重な時間だから逆にバタバタしている。

そうしてしばらく二人で拓也に見入っていたら、突如横を向いた伸也に無言で抱き締められた。

急なことに驚きはしたが、身体自体が覚えている伸也の体温と力の強さに抗う気は起こらない。

「きっと、瑞希が生んだ子だからだよ。拓也を大事だと思うのは」

不意打ちの言葉に涙が滲み出そうになり、慌てて伸也から離れる。



照れ臭いのもあるが、高そうなスーツに変なシミを付けたら大変だ。

俯いて顔を隠した私の頭を伸也はポンポンと優しく叩いた。

「入籍は瑞希の気持ちが固まってからでいいけど、二人の生活を支えたいから認知は急いだ方がいいと思う」

「伸也の方は、問題ないの？」

大丈夫と言いつつ、伸也が少し考えている風だったのが気になる。

ＣＥＯの隠し子発覚となれば社内外でスキャンダル扱いになるだろう。

「拓也はまだ小さいから、私は別に急がなくてもいいよ」

「いや、仕事は大丈夫。そもそも、俺達が連絡付かない状態になったのは、会社の連中のせいだから、文句は言わせない」

言われてみればそうだった。

無理矢理に渡米させられていなければ、二人は普通に授かり婚をしていただろうから。

後ろめたく思うことは何もない。

「瑞希が見つからなかったり、他の男に取られていたりしたらって気が気じゃなかった」

「まあ、私はすでに新しい男と暮らしていたけどね」

「うん。なかなか手強そうなライバルが出現していて焦るよ」

寝返りを打って捲れた拓也の布団を掛け直しながら、私達は目を合わせて声を出さずに笑った。



立ち読みサンプル
はここまで